

怖い客

矢樹純

〈三日月さん〉

一

「結構剃り残し、ありますか」

遠慮がちに尋ねられ、西堀千景はシェーバーを動かしつつ、いえいえ、と応じた。コロナ禍以降、スタッフは施術中マスクをつけるのが決まりとなったため、声がこもらないようにしっかりと発音する。

「全然大丈夫ですよ。綺麗にしてください、ありがとうございます」

そう取りなすと、千景とは逆に顔の上半分をタオルで覆った木戸は、口元だけをほころばせた。

「一応、鏡を見ながらしてるんだけど、老眼だからか、よく見えないのよ」

どう返して良いか分からず、そんな……と曖昧に濁し、シェーバ

ーを肌から離した。実際、この距離で見ても剃り残しが目立つ箇所はなく、丁寧に処理していることが窺えた。

「木戸様、一旦お膝を閉じて、横向きでお願いします」

千景の声かけに、木戸は「よっこいしょ」と身をよじり、こちらにお尻を向けた。極力肌が露出しないよう、下半身にかけてタオルとその下の白いガウンを少しだけめくる。谷間を押し広げるようにしてシェーバーを当てると、わずかな剃り残しを処理していった。

脱毛の施術に際し、顧客には前処理として予約前日にシェービングをするように案内していた。今回が三回目の施術の木戸は最初にカウンセラーが説明したとおり、肌に負担の少ない電動シェーバーを使い、きちんと保湿もしているようだった。光脱毛の光は黒色に反応するため、剃り残しがあると毛根に光が届かなかったり、また逆に肌にダメージを負わせてしまったりする可能性があるのだ。

シェービングを終え、再度仰向けの姿勢になってもらう。痩せ型の木戸が寒くないように、厚手のタオルで包むように体を覆った。施術をするのは下半身だけだが、衣服にジェルやローションがつくおそれがあるため、お客は皆ガウン一枚の格好になるようお願いしていた。

「先週はキャンセルしちゃってごめんなさいね。このところ急に冷え込んだもんだから、体調崩しちゃって、咳が止まらなくて」

「いえいえ、この時期は仕方ないですよ。早く回復されて良かったです」

顧客カルテによれば木戸は現在五十二歳で、将来の介護に備え、この年代でVIO脱毛を行う女性客は多かった。二十代後半の千景にとって、母親と変わらぬ年の客たちは話題こそあまり合わないが、大抵が穏やかで接客しやすかった。

「それではジェルの方、塗っていきますね。もし熱すぎるようでしたらおっしゃってください」

温めたジェルを、温度を確かめた上でシェービングを終えた肌に薄く塗り広げる。何年か前まで、光脱毛では肌を保護するために、冷たいジェルを用いなければならなかった。それにより冬場の、特に全身脱毛では顧客に負担をかけることになり、不満の声も多かったという。新たに開発された冷却機能の備わった脱毛器のおかげで、今の季節でも無理なく施術を行えるようになった。

ジェルを塗り終えたところでゴーグルをつける。膝を立てて仰向けで寝転ぶ木戸に、「では当てていきますね」と声をかけ、業務用脱毛器の前面に収められたハンドピースを手取る。「失礼します」と太ももの際に当て、シヨットを打った。強い光が瞬き、ゴーグル越しでも目を細めなくなる。

「お痛み、熱さは大丈夫ですか？」と確かめると、「はい」と眠た

そんな声が返ってくる。施術中はお客様の側もゴーグルを装着した上にタオルをかけており、視界が遮断しゃだんされるので、どうしても眠気を誘うようだ。「では、続けますね」と位置をずらしながら、決められた回数ずつショットを打っていく。

「――あ、私もその映画観ました。ラスト、ヤバかったですよね」

「ねー。しばらく席立てなかったもん」

「いいなー。私、まだ行けてなくて」

少し離れたブースから、人気の映画についてお客と盛り上がりつついるらしい二人の施術スタッフの声が聞こえてくる。カーテン一枚で仕切られた施術ブースはベッドと業務用脱毛器、タオルやジェルを載せたワゴンが置けるぎりぎりの広さしかないので、今日のように一人で施術する時はまだいいが、二人で入る時はすれ違うのに苦労するほどだった。あちらのお客は顔や背中を含む全身脱毛コースで、一人がショットを当てている間に、もう一人が次に施術する部位にジェルを塗るといふ分担作業をしていた。

「ていうかクライマックスで曲入るとこもエグくてー」

「あ、私もツボでした！　そこでそれ来るかって感じで。あのグルーブ、めっちゃファンなんですよー」

施術スタッフは好きなアーティストの話題に、だいぶ声が大きくなっていた。うるさくないだろうかと木戸の表情を窺う。特に不快

そうでないのに安堵あんどしつつ、引き続きハンドピースを滑すべらせつつ施術を続けた。たまに話好きのお客もいるが、脱毛中はあまりしゃべらない人の方が多い。実のところ、千景が脱毛サロンで働くことを選んだ理由は、その点が大きかった。

美容系の専門学校を卒業後、千景が脱毛エステサロンに就職したのは十年前のことだった。学生時代は美容師志望で、エステ業界にさほど興味はなかったが、就活をする中で、次第に自身の特性に向く業務環境について悩み始めた。

千景は元来が口下手くちべたで、エントリーシート上でこそよく考えて志望動機や自己アピールの文面を作るものの、面接となると緊張して頭が回らなくなり、質問に答えられないことがしばしばだった。国家試験に合格したものの、果たして自分にその資質があるのかと疑問に感じた。

顧客の要望を聞き取り、仕上がりに満足してもらおう。さらにリピーターとなってもらうには、コミュニケーション能力が必須となる。美容師としてのスキルだけでは仕事にならないのだ。学内のキャリアサポートで不安を打ち明けると、エステ業界——特に脱毛サロンを目指してみてもどうかと勧められた。施術中にそれほど会話をする必要がなく、なおかつ技術習得に真面目に取り組む千景には、丁寧さや正確性が重視される点に向いているとのことだった。

採用はスムーズに決まり、研修では飲み込みが早いと褒められた。実際に働き始めると聞いていたとおり、会話の負担も少なかった。仕事内容も職場環境も申し分なかったが、最初に就職した都内の中規模チェーン店は千景の入社後二年で不渡りを出して倒産してしまい、現在の勤務先である《マル・ビューティー》にやっこのことで再就職を果たしたのだった。

適宜工程を説明しながら何度か体勢を変えてもらい、すべての部位の照射を終えた。全身脱毛と異なり、VIO脱毛の施術は三十分も掛からない。最後に塗ったジェルを拭き取ったあと、眩しくないよう手をかざしつつ、木戸の顔にかけたタオルとゴーグルを外す。

「ありがとうございます。ちょっと寝ちゃってみたい」と目をこすった木戸は、ゴーグルの跡を気にするように鼻梁に触れる。なかなか跡が消えないとお客から訴えがあったため、以来鼻当ての下に不織布を一枚挟むようにしていた。

「お疲れさまでした。拭き足りないところがありましたら、こちらでお願いいたします」

上体を起こしてガウンの前を合わせる木戸に、熱い蒸しタオルを広げ、少し冷ましてから畳んで手渡す。

「乾いたタオルも置いておきますね。どうぞごゆっくりお支度くだ
ね」

かけた言葉と裏腹に、ときばきとした動作で足元に使用済みのタオルを入れるかごを用意し、ベッドの上に乾いた大判のタオルを置くと、一礼してカーテンを閉じた。それから施術ブース奥へと通路を進み、スタッフスペースのドアを開ける。

八畳ほどの室内は入って右手に仕切りを設け、スタッフが着替えを行うロッカールームとしてある。残る五帖程度のオフィスの中央には楕円形のテーブルを囲うように休憩用の椅子が置かれ、壁際には共用のノートパソコンが置かれたデスク、その隣に給水機が設置されていた。

スタッフ向けに用意された無料の酵素ドリンクを紙コップに注ぎ、マスクを外して手早く水分補給をすると、パソコンのスケジュール画面で予約の変更がないことを確認した。次の施術は三十分後だが、後片づけと準備の時間を考えると余裕があるとは言えない。一息に残りの酵素ドリンクを飲み干し、カップをゴミ箱に投げ入れてオフイスを出る。

千景が勤務する女性専用脱毛サロン《マル・ビューティー》新宿西口店は、駅から徒歩五分の商業ビルの五階にあった。受付の横にカウンセリングブースと待合室、その奥に四室の施術ブースが並んでいる。スタッフは全員女性で、脱毛を行う施術スタッフと、顧客対応や予約管理をするカウンセラーと呼ばれる受付スタッフに役目が分

かかっていた。

施術ブースを仕切るパーテーション越しに待合を覗くと、木戸はピンクのユニフォームの受付スタッフから、サービスのハーブティを受け取っているところだった。千景たち施術スタッフも、彼女たちと同じくVネックのチュニックに同色のパンツというユニフォームだが、色はグレーでジェルなどが飛んでも目立たないよう配慮されていた。予備を含め二着しか支給されないため、連勤になると毎日洗濯しなくてはならず、大手サロンではクリーニング業者に委託しているのにと愚痴を漏らすスタッフもいた。

こちらに気づいた木戸に会釈し、施術ブースへ戻る。ベッドに敷いた不織布を外して消毒すると、先ほど使用したハンドピースのジェルを拭き取り、こちらも他の器具とともに消毒した。作業の最中、受付スタッフに次回の予約日を伝える木戸の声が聞こえてくる。

「次は二か月後よね……あら、ちょうど娘の受験の時期と被っちゃうわ」

「でしたら三か月空けていただくのも大丈夫ですよ。予約はアプリから簡単に変更できますので」

若いお客はアプリで次回予約をすることが多いが、木戸の年代のお客は操作が面倒だからと来店時に次の予約を入れていくのが常だった。やり取りはまだ続いてはいたが、荷物を抱え直し、先ほどのスタ

ツフスペースの向かいに位置するストックルームに向かった。

「あ、西堀主任。お疲れさまです」

ドアを開けると、ピンクのユニフォーム姿の受付スタッフが振り返り、笑顔を向けてきた。三か月前にカウンセラーとして採用され、つい先月研修期間を終えたばかりの稲葉杏菜だ。タブレット端末を手に、使い捨てのシートやヘアキャップ、シヨーツといった備品が収納された棚の前にしゃがみ込んでいる。

「お疲れさま。何か探し物？」とそばに寄ると、いいえ、と手にしていたグレーのガウンらしきものを戻して立ち上がる。小柄な杏菜は千景よりもだいぶ背が低いので、見下ろす形となった。

きっちりとお団子にまとめ、前髪を横に流したヘアスタイルは身だしなみ規定どおりだが、杏菜の髪色は他のスタッフと比べるとかなり明るかった。メイクも濃いめで、特にアイメイクはラメを散らした暖色系のアイシャドウに太いアイラインを引いており、素顔がまったく窥えないほどだった。マネージャーに注意され、これでも大人しくなったのだが、やはり全体的に派手な印象を与えた。

「消耗品の発注するんで、在庫確認してたんです。タオルですか？」

どこか焦ったように棚の中段にある、洗濯済みのタオルが重ねられたかごに手を伸ばして尋ねてくる。

杏菜は以前キャバクラ店に勤務していたとのことで、まだ二十一

歳とスタッフの中では最年少だが、女性の多い職場には慣れているのだろう。施術スタッフの主任でサブマネージャーを務める千景に對しても、最初から物怖じせず話しかけてきた。管理職の一部からは目をひそめられつつも、カウンセラーたちの間ではすっかり馴染んでいた。

「ありがとうございます。あとガウンも取ってもらえる？」

わずかな違和感を覚えながら受け取ったタオルやガウンを抱え持ち、ポンプ式の容器に入ったジェルのストックをドア横のジェルウォーマーにセットする。隣のタオルウォーマーに十分な枚数があることを確認すると、クレンジングや保湿ローションをトレイに放り込んだ。次の担当客はフェイシャルも含む全身脱毛のため、VIOのみの木戸よりも必要なものが多かった。

「そうだ、今日って結構予約入ってますか？」

消毒済みのスリッパを手に出て行こうとしたところで、杏菜が思いついたように尋ねてきた。

「まあ、そこそこね。平日だから日中は空きがあるけど、四時以降は閉店まで埋まってるよ」

口早に答えると、杏菜は「えっ、ホントですか？」と濃いマスカラで縁取られた目を見開いた。「どうかした？」と杏菜の過剰な反応にたじろぎ、足を止める。

「いや、だってうちの会社、業績不振でヤバいっていうじゃないですか」

答えを聞いて、思わずため息が漏れた。

業務中はずっと施術とその準備で忙しい脱毛スタッフと違い、カウンセラーたちは受付や予約調整などの一連の接客を終えてしまえば、カウンター内で雑談をする余裕もある。杏菜は先輩カウンセラーから、ここしばらく会社全体での業績が下がっているという話を聞かされたのだろう。

「確かに上半期は一時期売上を落としたけど、夏頃から盛り返してきてるよ。回数券もかなり出てるみたいだし」

主任以上は営業会議にも出席するため、千景は社内全体の売上も把握はあくしていた。殊ことに新卒で入社したサロンで倒産を経験した身としては、数字にはかなり関心を持っていた。

マル・ビューティーの事業実績は昨年末からしばらく低調が続いていたが、夏に向けて打ち出した初回無料キャンペーンが好評と見えて、回数券の購入やコースでの契約で、売上は倍増していた。その割に予約が埋まっている日は少なかったが、おそらくそれはシーズンが過ぎて顧客の来店の間隔が空いてきたためだろう。店舗の規模からすれば、現在のように少ない人数で回せる程度の予約数なのは、スタッフとしてはありがたかった。

「そうなんですか？　でも新規のお客様からのお問い合わせって、あまりないですよ。受付の先輩たちも、前より暇になったって言うてますし」

杏菜は納得いかなそうに唇を尖らせる。

本人に悪気はなく、良く言えば素直とも取れるのだが、杏菜は人の言葉を信じやすく、影響を受けやすいタイプだった。前職のキャバクラを辞めた経緯も、ナンバーワンになったら一緒に住もうという担当ホストの言葉を信じ込み、借金をしてまで貢いだせいとのことで、その性質は変わっていないらしかった。

「確かに夏に比べると落ち着いて感じるけど、この季節はこれくらいが普通だと思うよ」と杏菜の主張を一部受け入れると、彼女は「ですよね」と大きくうなずく。

「これも先輩から聞いたんですけど、今の田丸昌彦社長たまるまさひこって全然別の業種からうちに来て、いきなり取締役とりしまりやくになったっていうじゃないですか。現場のことが分かってないくせにあれこれ口出してきて、評判も良くないって」

心持ち声をひそめて語った内容に、カウンセラーの何名かの顔が思い浮かんだ。彼女たちの中にネガティブな噂うわさが好きな面々がいると、以前管理職のグループLINEに報告が上がっていた。しょっちゅうスタッフや顧客の悪口で盛り上がっているらしいが、自社の

経営陣にまでケチをつけているようだ。

「確かに異業種の出身だけど、店舗にもよく顔を出してくださるし、前職での経験を活かして社長自ら経理業務を兼任してくれて、本部はかなり助かってるはずだよ。営業にも熱心で、社長がギフト券の契約を取ってきてくれたこともあるし」

庇^{かば}う口調がつい尖った。田丸が別の業種にいたことも、それでいながら取締役となったことも事実だが、何も知らないくせに、と反感を覚える。

前の会社が倒産し、再就職を目指してあちこちで面接を受けたが、新卒で二年しか職務経験がなく、加えて口下手な千景は、なかなか採用が決まらなかった。そんな求職の日々が半年ほど続き、大手や中堅どころを諦^{あきら}めて小規模経営のサロンへと軸を移して数社目に応募したのが、マル・ビューティーだった。

「入社二年で？ あそこの社長さん、従業員に何も説明せずに逃げちゃったらしいじゃない。大変だったね」

社長との面接に緊張する千景に、おっとりとした物腰の田丸は親身に事情を聞き取り、即時採用してくれたばかりか、一時金の支払いを提案してくれた。当時の貯金を切り崩す生活から脱却できたのは、田丸のおかげだった。

「それに稲葉さんだって、ここに就職できたのは田丸社長のおかげ

なんじゃなかった？」

自身の過去を追想し、杏菜が採用された顛末を思い出す。杏菜は途端にばつが悪そうな顔になった。

「前の職場を辞めることになって、田丸社長のお知り合いの紹介でここで働くことになったって聞いたけど」

本来であれば前職がキャバクラ嬢で多額の借金をした過去のある杏菜は、日勤のシフトに対応できるか、金銭トラブルを起こさないかといった懸念から、不採用となる可能性が高かった。彼女がこうして仕事に就けたのは、田丸の口添えのおかげのはずだ。

「ママが田丸社長と高校の同級生で、それで頼んでくれたんです。正直キャバの方が私に向いてると思ったんだけど、借りたお金、ママが全部払ってくれたし、また同じようなことになったらいけないから転職しなさいっていうのも、まあそうかなって。うち父親いなくて、ママは結婚しないで私のこと育ててくれたから、これ以上は心配かけられないし」

就職の件について言われると弱いようで、杏菜はうつむいて声をしばませた。その助言はもつともで、娘のことをよく理解している賢明な母親なのだろうと千景は思った。

会話が途切れたところで立ち去る機会を窺っていた時、受付の方で「いらっしやいませ」と声が上がった。折良く次の予約客が来店し

たようだ。

「じゃあ、次の準備があるから」と施術ブースに足を向ける。しかし杏菜は「あ、待ってください」と、せかせかと後ろをついてきた。先ほどまでの憂うれいは消え、興味津々しんしんといったふうに受付の方を気にする素振りで見せる。

「西堀主任がこのあと担当されるのって、《三日月みかづきさん》ですよ？」その名を耳にし、千景は顔色を変えた。唇の前に人差し指を立てると、問答無用で先ほどまでいたストックルームに杏菜を引っ張り込む。

「三日月さんって、次のご予約の押切瑠華おしきりるか様のことよね？ 誰が押切様をそんなあだ名で呼んでいるの？」

低い声で問い詰める。杏菜はしまったという顔で視線を逸そらした。

「あ……誰ってこともなくて、みんなそう呼んでるみたいだったのっ」

「でも、施術スタッフの誰かが広めたあだ名よね？」

とぼけようとする杏菜に、確信を持って尋ねる。施術スタッフ以外、そんな呼び方をするはずがない。千景が押切瑠華の施術を担当したのは過去に一度だけだったが、《三日月さん》という呼び名で、すぐに彼女のことだと分かった。

押切瑠華が初めて来店したのは三か月前、九月中旬のことだ。

健康的とは言い難いほど細い手足がすらりと伸びた、身長百七十センチ近いモデルのような体型に、その場にいたスタッフやお客の視線が集まった。屋内でも色の薄いサングラスをかけ、大きなマスクをつけた姿はまるで芸能人のようななたず佇まいで、受付スタッフは緊張しながらカウンセリングを行うことになった。

しかしマスクとサングラスを外すと、骨格がはっきり分かるほど不自然に痩せた顔貌に、内息を飲んだ。ぎよろりとした丸い目は夜行性のサルのように黒々としており、特徴的な上向きの鼻が尖っていた。フェイスヤルを除く全身脱毛を希望しているのと、全十八回のコースを申し込んだ押切瑠華は、それから先月まで、一か月おきに来店していた。

接客業において、スタッフが顧客に対し符牒ふちようのようなニツクネームをつけるのは、たまにあることだ。だが人目に触れないお客の体のプライバシーまでも預かる自分たちの立場では、それは決して許されない。もしも何かのきっかけでこの件が押切瑠華の耳に入るようなことがあれば、たとえコースの途中であってもキャンセルに応じなくてはならないだろう。スタッフたちの不用意な行動に、憤りいきどおをこらえて杏菜を質すた。

「確かに押切様は三日月形のタトゥーを入れてらっしゃるけど、お客様の身体的特徴が個人情報だつてことは分かるよね。施術スタッ

フだけが知り得る情報を、ましてお客様にあだ名をつけてスタッフ内で広めているとしたら、大問題よ。倫理的にも容認できないし、サロン全体の信用にも関わる事案だから」

なんとしてもあだ名をつけた施術スタッフを特定しなくてはと、杏菜に詰め寄った。杏菜はうろたえつつも、「でも……」と言いわけするように口を開く。

「押切様に関しては、大丈夫ですよ。場所だって肘の上だし、今の季節は長袖だから見えないってだけで、特に秘密にしてるわけじゃないと思います。あだ名だって馬鹿にしてるんじゃないかって、むしろカッコいいなと思ってみんな呼んでるんで」

「隠してるかどうかとか、どういうつもりで呼んでるとか、そんなこと言ってるんじゃないの！」

杏菜は何が問題なのか、まったく分かっていないようだ。話の通じなさに絶望しそうになるが、サブマネージャーとしてきちんと指導しなくてはならない。

「もしあなたたちから『三日月さん』なんてあだ名で呼ばれてるって押切様が知ったら、どんなお気持ちになると思う？ 不愉快だし、このサロンは信頼できないって考えるでしょう」

理解できるよう言葉を砕いて説明すると、ようやくほっとした顔で「それは、そうかもしれないです」と受け止めてくれたようだ。だ

が改めてあだ名をつけた施術スタッフについて尋ねると、杏菜は表情を曇らせた。

「……すみません。私はカウンセラーの先輩がそう呼んでるのを聞いただけで、誰が言い出したとかは知らなくて。でも、今後は気をつけます」

うなだれて謝罪する。本当に知らないのか、完全に杏菜の言い分を信じることはできなかったが、これ以上追及することは難しそうだった。

「とりあえずもうすぐ予約の時間だし、施術に入るけど、この件は上の人にも共有して、誰が言い出したのか特定する。受付スタッフに対しても、改めて事情を聞くことになると思うから」

きちんと当人と話をしなければ、根本的な解決とはならない。身を縮めて顔を伏せる杏菜をその場に残し、千景はちょうど温まったジェルとタオルを手に施術ブースに向かった。

ベッドを整え、長身の押切瑠華に合うLサイズのガウンとタオルを置く。ワゴンに器具を並べて準備を終えると、すでに受付を終えて待合にいた押切瑠華を迎えに行った。

「押切様、ご来店ありがとうございます。本日担当させていただきます。西堀です」

この日もマスクをつけたままの押切瑠華を施術室に案内する。フ

エイシャルの施術はないので、ジェルがつく可能性があることを了承してもらえれば、マスクの着用に問題はなかった。

「寒い中、ご来店ありがとうございます。前回の施術後、お肌のトブルなどはありませんでしたか」

通路を進みながら話しかけるが、押切瑠華は「ああ、大丈夫です」と、ぼそぼそと返したのみだった。元々それほど話さないお客だが、今日は一層口数が少ないようだ。見開いた目が落ち着かなく動き、何かを警戒しているふうに見える。

「それではお支度が済んだ頃にまいりますね。何かありましたらお申し付けください」

明るく告げると、押切瑠華はこくりとうなずき、ベッドの方へと進んだ。脱いだ服を入れるかごをベッドの上に載せ、一礼してカーテンを閉じる。どことなく緊張した空気を感じつつ、五分ほどしてから「押切様、よろしいでしょうか」と声をかけた。

どうぞ、とか細かい声で返答があった。カーテンを開けると、押切瑠華はガウン一枚の格好でベッドに腰掛け、スリッパに足を入れていく。

「今日はまず、うつ伏せでお願いします」

押切瑠華は無言で着替えたばかりのガウンの腕を抜く。左腕の三日月のタトゥーからなんとなく目を逸らしつつ、彼女がベッドの上

にうつ伏せに横たわるのを待った。白い華奢な背中にガウンと、大判のタオルをかけた上で、ワゴンのシェーバを手取る。

「では、おうなじ周りからシェービングさせていただきます」

事前のカウンセリングで、うなじは残す形だと聞き取ってあった。乾燥を防ぐローションを塗った上で、周辺のみシェーバーを当てる。ちりちりと細かな体毛に刃が触れる音が、やけに大きく感じられた。他のブースでも施術はしているはずだが、会話の声は聞こえてこない。

失礼します、とガウンをはだけ、背中の方へとシェーバーを滑らせた時、「あの——」と押切瑠華が声を上げた。何か違和感でもあったのかとスイッチを切る。

「どうなさいました？」

電動シェーバーが肌を傷つけることはそうそうないが、痛みに敏感なお客もいる。異常がないか、慌てて肌に目を走らせた。赤くなっている箇所はない。

「失礼しました。お痛みなどありましたでしょうか」

重ねて尋ねると、押切瑠華はうつ伏せの体勢のまま首をねじり、顔だけを横に向けた。落ちくぼんだ目が切迫した色を帯び、こちらを捉えている。マスクがもごもごと動き、不明瞭な響きが漏れた。

「ちょっと、お店の方で、確認してもらいたいことがあって」

ベッドを軋きしませてゆっくりと体を起こすと、押切瑠華の骨ばった全身が露わになった。彼女はじつと千景を見据えたまま、硬い声で、区切るように告げた。

「ここのスタッフで、私の腕のタトゥーを写真に撮って、SNSに上げた人がいるみたいなんです」

二

「——この件、他に知っているスタッフは？」

スマートフォン画面から視線を上げたマル・ビューティー取締役社長の田丸昌彦は、蒼白そうはくな顔で尋ねた。「私だけです」と千景が答えると、田丸は染めた様子のない白髪しろが交じりのぼさぼさ頭を抱え、「まいったなあ」とつぶやく。

「監督不行届で申しわけありません。とにかく、まずは田丸社長にご相談してからと思ひまして」

田丸の向かいの席にかけた千景は、机の下で組んだ両手の指に力を込めた。

九坪ほどの広さのマル・ビューティー本部オフィスは、新宿西口店と同じビルのすぐ上階の六階フロアに位置していた。エレベーターを降りた正面のドアを開けると、左手に社長と事務スタッフ用の

デスクが三台だけのワークスペース、中央に会議テーブルが据えられ、右手奥に狭い給湯室と倉庫があるという造りだ。

マル・ビュートイーは現在、本店である新宿西口店の他、池袋店、横浜店、町田店と関東近郊に四店舗を展開している。月に一度、この本部オフィスに各店のマネージャーとサブマネージャーが集まり、定例会議が開かれていた。

新宿西口店は他店に比べてオフィスが狭いため、店舗会議でも本部のオフィスを借りることがあり、その分社長との距離も近かった。店のスタッフたちとの飲み会に田丸が顔を出し、飲食代をカンパししてくれることもあるほどだった。

「確かに、他の管理職に伝えるのは、慎重にした方がいいだろうね」
動物園の象に似た小さくつぶらな目をしよぼしよぼさせ、弱々しくため息をつく。四十代後半の田丸は、仕立ての良い黒のスーツこそ身につけているものの、突き出たお腹のせいでジャケットにはしわが寄り、ネクタイも緩んでいた。

周囲がいくら健康のためにと勧めてもジム通いを始める気配はなく、美容業界の経営者といった華やかさがまるでない。「社長、もう少し身だしなみに気をつけてください」と女性管理職たちから説教される様は、女子校で生徒たちに軽んじられつつも慕したわれている担任教師のような構図だった。

そんな田丸は四十代半ばまで独身を貫いてきたが、二年前にようやく身を固めた。妻はマル・ビューティーの中でも群を抜く売り上げを誇る、横浜店と町田店のマネージャーを兼任する三十代前半の管理職だ。田丸より一回り以上も年下だが、仕事ぶりは的確でスタッフの信頼も厚く、仕事でも家庭でも、社長が妻に頭が上がらないことは明らかだった。ちなみに社長夫人は現在一人目を妊娠中で、まもなく産休に入る予定と聞いている。

それもあって、千景はまず田丸だけに報告を上げることにしたのだ。

押切瑠華が来店したその日のうちに、千景は社長の田丸昌彦に社内メールを送り、翌日に予定されていた定例会議後に時間を取ってほしいと頼んでいた。本来であれば上司である自店のマネージャーに報告するのが筋だったが、この件は重大なコンプライアンス事案だ。できる限り広めるべきではないと考え、先に田丸の判断を仰ぐことにした。

「そもそも、この写真をアップしたのが、うちの従業員の誰かだというの、間違いないのかな」

田丸は会議用デスクの上に、千景から預かったスマートフォンを置いた。

「ええ、押切様は事情があって、お体のタトゥーを人目に晒すこと

のないように気をつけておられたそうなんです。唯一の例外が、うちのサロンだったとのことでした」

そこにはSNSの投稿のスクリーンショットが写っている。アップで撮られた女性の二の腕の写真で、白い肌に青みがかったタトゥーが彫られていた。植物の葉を連ねて三日月を象ったボタニカル調の意匠と、そのそばに金星らしき小さな星が輝いている特徴的なデザインは、押切瑠華のものに間違いなかった。写真には「ルナ様降臨？」という一言だけのコメントが添えられていた。

「投稿したアカウントは、おそらく捨てアカウントのようで、押切様が問い合わせのメッセージを送ってすぐにアカウントごと削除されたとのことなんです。ですからこちらは、押切様が削除前にスクショした画像だそうです」

その画像を、千景のスマートフォンに転送してもらったのだ。

「ということは現在、この画像が世に出回っているというわけではないんだね」

田丸が少しほっとしたように眉を下げる。

「はい。確認したところ、フォロワーもほとんどいないアカウントで、拡散された様子はありませんでした。でも、そのことは問題ではないんです」

千景はスマートフォンを手に取り、操作しながら続けた。

「コメントに『ルナ様降臨?』とありましたよね。押切瑠華様は、実は『ルナ』という芸名で、顔出しをせずに歌手活動をされているそうなんです」

表示させた画面を再び田丸の方へと向ける。そこには長身で痩せた女性の後ろ姿のアーティスト写真が写し出されていた。音楽プロダクションのサイトのもので、マイクを手にした左腕に三日月のタトゥーが彫られているのが分かる。

「つまりこの写真を投稿した人は、押切様がルナというアーティストであると感じていたことになりました。事務所の方にも、この件は報告されたとのことでした」

田丸の額に^{あごらあせ}脂汗がにじむ。「それで……」とかすれた声で先をうながした。

「事務所の担当者が、直接社長と話がしたいと言っているそうです。まずは社内で共有させてほしいと伝えて、待ってもらっている状況です」

がつくりと肩を落とした田丸は、深く息をついた。

「施術中の顧客の姿を無断で撮影しただけでも大問題なのに、それをSNSに投稿して、しかも相手は顔出ししていないプロの歌手って——」

力のない声で言って、田丸は社長用デスクの背後の壁にかけられ

た前社長である田丸悦子——亡き母の写真を仰いだ。

マル・ビューティーは長年化粧品の販売部員として働いてきた田丸悦子が四十代で独立し、一人で起ち上げた会社だった。自ら新人研修を行い高いサービス品質を維持する姿勢と経営手腕が評判で、脱毛エステ業界の女傑と呼ばれた彼女は、最初にオープンした新宿西口店に次いで横浜店、池袋店と徐々に店舗数を増やし、小規模チェーンながら間もなく創業三十年を迎えようとしている。

その悦子が虚血性心不全で急死し、当時は食品メーカーの経理として働いていた息子の昌彦が急きよあとを引き継ぐ形で社長となったのが、五年前のことだった。

悦子は昌彦が生まれて間もなく離婚しており、女手一つで育ててもらった恩を返したいと就任挨拶で意気込みを語ったが、店舗マネージャーを務める女性管理職たちの視線は、当初は冷ややかだった。だが田丸はそんな空気をものともせず、各店舗を頻繁に訪れてはアルバイトを含む従業員たちの愚痴とも思える話まで丁寧に聞き取り、実際に施術に用いる機材やジェルなどの使い心地を確かめることまでした。そうして現場の声にじっくり耳を傾けたのち、その後経営会議で一部のジェルやローションを海外製の良質で安価なものに変えることを提案した。備品のストックの無駄、タオルやガウンのクリーニング業者も見直され、前年の赤字が黒字に転じると、

ついにマネージャーたちから一目置かれるようになったのだ。そんな経緯があったからこそ、当時から敏腕管理職として田丸を支えてきたかのマネージャーも、彼との結婚を決めたのだろう。

「經理の仕事には単に数字を見るだけじゃなく、その数字から社内
でどんな問題が起きているのかを把握はあくして、解決方法を考えること
も含まれるからね」

あくまで穏やかな田丸の言葉に触発され、以来千景も売上ばかり
を見るのではなく職場の問題点にいち早く気づき、解決しようと思
識するようになった。

ただそれらの過去を知らずに近年採用されたスタッフの中には、
冴さえない中年男に店舗をうろつかれたくないなどという子供っぽい
理由で田丸を毛嫌けざいする者もいた。

「西堀さんは、以前にも押切様を担当したことがあったんだよね？
その時は彼女が有名人だつて気づかなかつたの？」

「ええ。私、音楽関係はあまり詳しくなくて、まして顔出ししてない
となると……」

咎とがめる口調ではなかったが、自分が把握できていればこんなトラ
ブルにならないよう配慮できたのではと、語尾が小さくなった。

「でも本当のところ、『ルナ』さんは、そんなに有名なアーティスト
じゃないと思います。一応プロダクションに所属して歌手活動はし

ているみたいですけど、この会社のページ以外にほとんど情報も出ていなくて、検索しても、話題になっている様子もないんです」

言いわけのように、千景は自身がルナについて調べた結果を報告した。所属する音楽プロダクションも大手ではなく、千景が名前も知らないアーティストが数名所属しているだけだった。出演情報も、二年前から更新されていない。

「うちのスタッフが彼女のことを知っていたのが、不思議なくらいですよ。しかもわざわざ写真に撮ってSNSに上げるなんて」

改めて今回の騒動を引き起こした張本人に対し、憤りを覚える。サブマネージャー兼主任の千景は、現在働いている施術スタッフ全員に自ら研修を行っていた。私たちは顧客の肌に直接触れる、大切な身体を預かる立場にある。だからこそ単に機材の扱いを覚えるだけでなく、お客様に安心していただかなくてはいけない。そうして誠意ある接客をすることで、自分たちがサロンの信頼を支えるのだと説いた。その教えが、まったく伝わっていなかったわけだ。

「実際、施術中に写真を撮るなんてこと、可能なんだろうか。スマホの持ち込みは禁止されているよね？」

田丸はまだ信じられないというように、ゆるゆると頭を左右に振った。

「サービス規定では職務中、スマホはロッカーに入れる決まりになって

いますが、これまでもルールを破ったスタッフは何名かいました。また施術中、お客様はゴーグルをつけた上からタオルをかけた状態となるので、完全に視界は遮さえぎられます。もしもシャッター音を消して撮影できるアプリなどを使ったのであれば、お客様に気づかれなように写真を撮ることはできたと思います」

遺憾いかなだがその点は認めるしかなかった。田丸は何度目か分からなため息をつく、「じゃあやっぱり、押切様のおっしゃるとおりなんだろうね」と表情を引き締めた。机に身を乗り出し、いつになく険げわしい眼差しで尋ねる。

「押切様を担当した——写真を撮ることのできたスタッフは、特定できてるの？」

はい、と顎あごを引くと、千景はバッグからタブレット端末を取り出し、改めて顧客カルテを確認した結果を報告した。

「押切様はこれまでに四回の施術を受けていて、内二回は私が担当しました。残る二名がこちらです。二回とも、二名体制で施術していました」

昨日、お客と映画の話題で盛り上がっていた二人組だった。どちらも二十代前半で、千景からすると少し接客態度が砕くだけすぎないように思えるが、顧客の評判は悪くない。特に若い年代からは話していて楽しかった、親身になってくれたと、リピート率も高かった。

「二人でつてことは、どちらかが片方に隠れて写真を撮るといのは難しいよね」

「ええ。おそらく二人で共謀きようぼうして撮ったんでしょ」

昨日のやり取りで、映画の音楽のことが話題になっていた点からしても、彼女たちは音楽好きの可能性が高い。あまり有名でないルナを以前から知っており、特徴的なタトゥーで押切瑠華が当人であると特定したのではないか。そして自分たちしか知り得ない情報に触れて舞い上がり、二人で写真を撮った上、SNSに投稿した。一人であればためらう場面でも、仲の良い相手となら盛り上がって悪ノリしてしまうことはよくある。

「状況からして、この二人がやったというのは間違いないと思います。ただ追及するにしても、まずは社長の意向を伺ってからにすべきかと思い、相談させていただきました」

田丸は腕組みをすると、しばし無言で考え込んだ。眉根を寄せてネオンに光る窓の外へと目をやっていたが、やがて腕を解き、まっすぐに千景に向き直った。

「とりあえず押切様の所属事務所には、私から連絡を入れるよ。ただその前に明日、写真を撮ったと思われるスタッフたちに、なぜそんなことをしたのか、聞き取りをお願いしていいかな。私が直々に話すよりはそっちの方がいいと思うし、先方に謝罪するにしても、

きちんと状況を把握してからじゃないとね」

彼女たちは二人とも、午前中からシフトに入っていた。明日、朝イチでミーティングを行う旨を彼女たちにLINEすると、押切瑠華から預かった事務所の担当者の連絡先を田丸に渡す。

「緒方さんとおっしゃる男性で、押切様のマネージャーだそうです」
その名を口にした刹那、田丸は小さな目を見開いた。携帯電話の番号とメールアドレスが記載されたメモを見つめ、思い詰めた表情でデスクチェアに沈んでいる。やけに動揺した態度を怪訝に感じつつも、千景は田丸に頭を下げると、本部オフィスをあとにした。

三

「いや、ホントなんの話か分かんないんですけど」

二人の施術スタッフは、きょとんとして顔を見合わせ、「ねえ」と声を合わせた。

田丸に事態を報告した翌朝、早めに出社してもらった彼女たちと上階の本部オフィスに移動し、押切瑠華から苦情があったことと、彼女の事務所と協議するために詳細を説明してほしい旨を伝えた。しかし二人の反応は、千景が意図しないものだった。どちらも身に覚えがないと、断固として主張したのだ。

「確かに押切様の施術は私たちで担当しましたがけど、ミュージシャンをされてるなんて知らなかったし、施術ブースにスマホを持ち込んだことなんかないですよ。写真に撮ってSNSに上げるなんて、そんなお客様のプライバシーを外に漏らすようなこと、やるわけないじゃないですか」

「そうですね。ていうか施術中はずっとお互いが目に入る場所で作業してるし、相手の目を盗んで撮るなんてできませんから。もちろん、彼女がそんなことするはずないですけど」

一年先輩のスタッフが、後輩を庇うように表情を硬くする。千景はその言葉の真偽を図るように、じっと二人を見つめた。まっすぐにこちらを見返す眼差しに、嘘や怯えの気配はなかった。

「……ごめんなさい。先方の言い分しか聞かずに疑うようなことを言ってしまった。もう一度、押切様によく確認してから、改めて話をさせてもらうね」

内心混乱しながらも、部下たちに頭を下げる。そろそろ朝の店舗ミーティングの時刻が迫っていた。五階に戻ろうと二人をうながすが、後輩の方は机の上の顧客カルテを見つめたまま、なかなか動こうとしなかった。やがて下から睨むような視線をこちらに向けると、ぽつりと言った。

「押切様の施術を担当したのって、私たちと西堀主任だけですよね」

がたがたと乱暴な音を立てて腰を上げ、椅子も戻さず出口へ向かった。そのあとを追う先輩スタッフが、尖った口調で言い捨てる。

「私たちと違って、主任は管理職用のスマートフォンを支給されますよね。もし押切様が嘘をついてるんじゃないなら、どっちかがやったってことになりますね」

二人は冷たい一瞥いちべつをくれると、千景をその場に残して出ていった。

この日は朝から予約が立て続けに入っていたため、田丸への報告ができないまま午後二時を過ぎていた。他にスタッフのいないオフィスでおにぎり一つだけの遅い昼食をとりながら、千景は考えに沈んでいた。

SNSにアップされたという画像。特徴的なタトゥーの柄、そして細く長い腕も、押切瑠華のものだと思えた。背景は映っていないかったので施術室で撮られたかどうかは分からないが、押切瑠華はこのサロン以外で体を他人の目に晒したことはないという。

自分が写真など撮っていないことは承知している。だが部下の二人が嘘をついているとも思えない。いったい何が間違っているのだろう。ほとんど味のしないまま食事を終えた千景は、壁際のパソコンデスクの方へと椅子を移動させた。

顧客管理画面を開き、再び押切瑠華のカルテを呼び出す。初めて

来店予約をしたのは九月の上旬で、翌週にカウンセリングを受けて全十八回のコースを申し込んでいた。担当カウンセラーは稲葉杏菜だった。

そう言えば――と千景は一昨日の杏菜とのやり取りを思い返した。杏菜は押切瑠華を《三日月さん》というあだ名で呼んでいたが、彼女のタトゥーのことが受付スタッフたちの間に広まったのは、どういった経緯だったのか。

先ほど施術スタッフたちは、顧客のプライバシーを外に漏らすこととはないと言い切った。これまで、彼女たちのどちらかがその件を広めたものと思っていたが、そうではなかったのか。

もしかすると、間違っていたのは最初からなのか。あの日見た光景が蘇^{よみがえ}る。暗かったのではつきりとは見えなかったが、やはりあの色合いは不自然だった。

休憩時間はまだ十五分残っていた。オフィスを出ると受付に向かい、ちょうど先輩スタッフとおしゃべりしていた稲葉杏菜に声をかける。

「稲葉さん。聞きたいことがあるんだけど、ちょっとだけ時間いい？」

「あ、はい。なんででしょうか」

杏菜は特に警戒する素振りもなくカウンターから出てきた。どこで話をするべきか、少し迷って、エントランスのドアを示す。

「屋上で話しましょう。すぐに済むから」

杏菜の顔がにわかに緊張を帯びた。

店舗が入っている商業ビルの屋上は、出入りは自由だが人目につかず、他のフロアに声が届くこともない。そのため新宿西口店では、管理職がスタッフを叱責する際に呼び出す場所としてよく利用されていた。エレベーターの扉が開くと、二人無言で乗り込み、階表示のランプを見上げる。

最上階の九階で降り、連れ立って屋上に向かう階段を登った。鉄扉を押し開け、コンクリート敷きの屋外に出る。薄く空を覆う雲の切れ間から注ぐ陽光の下、使われているのか定かでない給水タンクの横を通り過ぎた。錆びたフェンスの手前で足を止めると、冷たいビル風が吹きつけた。

「カーデイガンとか、持ってきたら良かったですね」

乱れた前髪を押さえながら、杏菜が取り繕うように明るく言った。千景はそれには答えず切り出した。

「聞きたいことっていうのは、押切様のことなの」

杏菜は口元に浮かんだぎこちない笑みを凍らせ、目を見開く。

「押切様の写真を隠し撮りしてSNSに投稿したのは、稲葉さん、あなただよね」

しばしの沈黙ののち、杏菜は真顔になって答えた。

「……そんなこと、していません」

しらを切られるのは織り込み済みだった。千景は躊躇なく次の一手を指す。

「じゃあ一昨日、ストックルームであなたがグレーのユニフォームを手にかけていたのはどうして？」

びくりと肩を振るわせた杏菜が、救いを求めるように足元のひび割れたコンクリートに視線を泳がせる。

あの日、彼女が手にしていたグレーの布を、千景はガウンだと思いついた。受付スタッフの杏菜がグレーのユニフォームを持っていないはずがない。顧客用の白のガウンが、暗かったのでグレーに見えるのだと思っていた。だがそのすぐあとに杏菜に取ってもらったガウンはそんな色合いではなかったため、違和感を覚えたのだ。

「あれって、以前持ち出したユニフォームを在庫確認の前に返してたんでしょう。グレーのユニフォームを着ていれば、警戒されずに施術ブースに入り込めるものね。ブースはカーテンで仕切られているだけだから、施術後に顧客が着替えている時に、隣の空いているブースからスマホを差し入れることもできる。稲葉さんは押切様が自分の知っているミュージシャン——『ルナ』じゃないかと考えて、それを確かめようとしたんじゃないの？　そして間違いないと分かかって、思わずSNSに写真を上げてしまった」

うつむいていた杏菜が、はっとしたように顔を起こした。

「違う……」と上擦る声でつぶやき、拳を握り込む。

「私、SNSに写真をアップしたりなんてしていません！ 頼まれて、写真を撮っただけなんです。それが押切様のためだからって」

この後輩はいつたい、何を言っているのだろう。にわかには頭痛を覚え、こめかみに指を添えた。

「なんでタトゥーの写真を撮ることが、押切様のためになると思ったの？」

「撮ろうとしたのはタトゥーじゃないです。私は押切様の腕の写真を撮ったんです」

杏菜はむきになって反論するが、その意図はさっぱり分からない。

千景は状況を整理するため、改めて尋ねた。

「稲葉さんは、どういう理由で、誰に頼まれて、押切様の腕を写真に撮ったの？」

杏菜は、そこでなぜか得意げに胸を張り、堂々と答えた。

「押切様が違法薬物に手を出しているって情報提供があったそうで、左腕に注射痕がないか確かめるために、写真を撮ってきてほしいと頼まれたんです。もし本当だったら、逮捕することが彼女のためになるからって。頼んできたのは当然マトリ―厚生省の麻薬取締官ですよ」

四

先ほどまでは気にならなかった寒気が全身を包み、膝が震え始めた。重要な役割を果たした高揚感からか、頬を上気させた杏菜を、ひとまず戻ろうと促した。エレベーターのある九階に下りる階段の途中で、めまいを起こし、しゃがみ込む。大丈夫ですか、と心配そうに駆け寄ってきた杏菜の顔を見ずに尋ねた。

「――稲葉さん。その麻薬取締官は、どうやってあなたにコンタクトを取ってきたの？」

「え？ インスタのDMですけど」

早くも胃がきりきりと痛み出したが、聞くべきことはまだあった。

「稲葉さんのインスタのアカウントは、脱毛エステで働いてるとか、そういう素性や職業が分かるような写真がアップされてるのかな」「そうですね。本名までは載せてないですけど、友達に見せるプライベートなアカウントなんで普通に顔出ししてるし、『サロンに転職決まったー』みたいな投稿もしてたかも。あとは休憩時間にお店の近所でランチした時に撮った写真とか、職場の飲み会の写真とかもアップしてます」

ということは、どの地域の店舗で働いているかといった情報が向

こうに漏れた可能性が高い。そして職場の飲み会の写真に田丸社長が写り込んでいた場合、勤務先がマル・ビューティーであることも特定されたかもしれない。マル・ビューティーの公式サイトには、社長挨拶として田丸の写真が掲載されている。

本物の麻薬取締官が、SNSのメッセージ経由でそのような依頼をしてくるなど考えられない。人の言葉を過剰に信じやすい杏菜でなければ、それを鵜呑みにして顧客の写真を隠し撮りすることはなかっただろう。

何かがおかしかった。複雑に絡み合った事態に精神を摩耗まもうさせつつも、このトラブルを解決するため、必要な情報を聞き取っていく。

「じゃあ、稲葉さんはその麻薬取締官に頼まれて、押切様のお体を写真に撮ったことは認めるのね？」

「はい。押切様のプライバシーに関わることだし、周囲には黙っていてほしいと言われたので、西堀主任にも報告できなくて、すみませんでした。でも押切様の腕には注射跡なんてなかったし、疑いは晴れたんだと思いますよ。私が撮った写真をDMで送ったあとは、もう向こうからは何も言ってこないですし」

千景が指摘したように、杏菜はグレーの施術スタッフ用ユニフォームを着て施術ブースに忍び込んだ。押切瑠華の隣のブースが空いていることを事前に確認した上で、施術スタッフがブースを出て彼

女が着替えている時にカーテンの隙間から写真を撮ったのだという。麻薬取締官のアカウントはいつの間にか削除さくじよされており、捜査のために一時的に取得したアカウントだったのだろうと杏菜は語った。

「押切様の三日月のタトゥーがカッコ良くて、つい受付の先輩にしゃべったら、『三日月さん』って呼ばうってことになって。そのことは本当に、申しわけありませんでした」

顧客にあだ名をつけるきっかけを作ってしまったことは本心から反省している様子で、杏菜は神妙しんみょうな顔で頭を下げた。

休憩時間はあと五分も残っておらず、これ以上、杏菜から有用な話は聞けそうになかった。実際にインスタにどんな投稿をしていたか確認したいからと、最後に杏菜のアカウントIDだけ教えてもらうと、疲弊ひへいした体を引きずるようにして午後の仕事に戻った。

夜八時までの勤務を終え、オフィスで日報を書きながら、遅い夕食にビル一階のコンビニで買ってきたプロテインバーかじを齧る。この時間、すでに店舗に居残いのこっているのは千景一人だった。社長の田丸には、予約の合間の時間で杏菜から聞き取った内容をメールしてあったが、それに対する返信はなかった。

田丸は今日にでも押切瑠華のマネージャーである緒方に連絡を入れると言っていたが、どうなったのだろうか。こちらから結果を尋ね

るのも気が引けて聞けずにいた。

日報を書き終えてパソコンを閉じる。帰り支度をしながら、ふと思い出してスマートフォンでインスタのアプリを開いた。千景自身が投稿することはあまりなかったが、友達の投稿を見るためにアカウントだけは持っていた。

昼間に教わった杏菜のIDを検索窓に打ち込み、彼女のアカウントを開く。メイク小物の写真をアイコンにしたプロフィールページから、その下に並ぶ画像をスクロールしていった。ランチの際に撮ったと思しき料理の写真が主だが、たまに人物の写真もある。杏菜が話していた職場の飲み会の写真もあった。千景も参加した、暑気払いと称して有志でビアガーデンに行った時のものだ。田丸の姿もそこにあり、やはりこのアカウントから杏菜がマル・ビューティーのスタッフだと特定されたのだろう。

どうしてこうも個人情報むとんちやくを無頓着たながに垂れ流ながしてしまうのかと呆れつつ、オフィスを出て店舗せじょうを施錠する。エレベーターに乗り込み階数ボタンを押すと、再びスマートフォンの画面を開いた。

一階に降り、エントランスへと向かいながら、さらに杏菜のインスタの過去の画像たどを辿る。友人と旅行にでも行ったのか、例によって濃い化粧をしたまま、温泉旅館の浴衣姿でポーズを取った写真。回転寿司の皿を一コマずつ分割した写真。青い海に浮かぶ江の島ら

しき灯台の突き出た島の写真。そのすぐ下の、少し年配の女性と杏菜が並んで写る画像に手が止まった。

自宅で撮った日常の一枚なのだろう。雑然と散らかったりリビングで、ソファーにかけた杏菜と、おそらく彼女の母親と思われる女性。杏菜の膝の上では飼いだ猫らしい白い大きな猫が、柔らかそうなお腹を見せている。くつろいだ表情で猫を抱いた杏菜は、投稿された中では唯一、素顔で写っていた。

肉厚な唇の形は隣で笑う母親にそっくりだったが、アイメイクをしていない杏菜は、普段の印象とだいぶ異なっている。小さな丸い目は、優しく気弱そうな印象を与えた。

こちらは切れ長の母親の目元とは似ていないようだと思いつつながら、スクロールしかけた指が止まった。まさか、と写真に見入る。慌てて先ほど見た別の写真を表示させて見比べた。間違いないと感じた。

これは、どういうことなのか。昨日の田丸のおかしな反応は、この件と関係しているのか。思考を巡らせるうち通行人とぶつかりそうになり、ビルの前で棒立ちとなっていたことに気づく。歩道の端に寄ろうとした時、頭上で金属に何か当たったようなかすかな物音がして、顔を上げた。マル・ビューティーの看板の、さらに上方。屋上のフェンスの辺りに視線を移し、愕然とする。

スマートフォン履歴から電話をかけながら、猛然とビルの中へ

駆け戻^かる。エレベーターのボタンを連打して飛び乗ると九階のボタンを押した。スマートフォンから電源が切られているとメッセージが流れる。気が遠くなりそうな時間ののち、扉が開くと階段を駆け上がった。鉄扉を押し開けフェンスの向こう側に立つ人影に叫ぶ。

「それで問題が解決するんですか！」

驚いたように首をすくめ、そろそろと振り返る。千景を認めたその人物は、悲愴^{ひそう}な顔でしばし考えてから答えた。

「いいや。しないね」

*

「――ずっと、彼に脅^{おそ}されていたんだ」

田丸昌彦は机の上の、くしゃくしゃになったメモに視線を落とす。そのまま言った。千景が手渡した、押切瑠華のマネージャーの連絡先。

田丸は以前から緒方と関わりがあり、彼が音楽事務所の人間などではないことを知っていたという。

「緒方は表向きは探偵業をしているが、裏社会とも繋がりがあある人物でね。過去に彼に借金清算の仲介を頼んで、そこで弱みを握^{にぎ}られてしまった。秘密を漏らされたくなければ、ちょっとした仕事をししてほしいと協力を求められて、悩んだ末に条件を飲んだ。違法なこ

とはあったけれど、金を要求されたわけじゃない。会社の業績にも影響は出ないと踏んだんだが、今はその判断を後悔してるよ」

緒方が田丸に求めた条件。それはマネーロンダリングに協力することだった。

「まず緒方が裏社会の人間から、申告できない方法で得られた現金を預かってくる。その金で僕が自社の回数券やギフト券を購入したり、コース契約の売上として計上したりする」

それらのチケットや契約を一定期間が過ぎてから解約するという形で再び現金にして返金すれば、すべて綺麗な金になる。確かに田丸が企業から契約を取ってきたとギフト券の売り上げが入ることもあったし、会社の経理を担っていた彼なら、そうした工作をすることは可能だっただろう。そのため売上はアップしても、予約数はさほど増えないという状況となっていたのだ。

だが緒方の要求は徐々にエスカレートし、さらに大きな金額を頼まれるようになった。田丸はついにこれ以上は無理だと拒否した。それがこの夏頃のことだったという。

「今回のSNSの投稿をめぐるトラブルは、最初から仕組まれていたものだったんだ」

押切瑠華が来店したのは、田丸が協力を拒んだ直後のことだった。緒方は最初から田丸を陥れるつもりで、自分の息のかかった女性

を客として潜り込ませたのだろう。押切瑠華はミュージシャンとはいうものの、活動実績もなく、その名も知られていなかった。あの音楽事務所自体、本当に存在するのか分からない。緒方は田丸に揺さぶりをかけるために会社の信用を損なうような問題を起こし、新たな脅迫の材料としようとしたのだ。

ただ、この件が世間に広く知られ、経営に支障が出れば、資金洗浄の隠れ蓑として利用することもできなくなる。そのためすぐに投稿を削除し、脅しの手札とするに留めたのだろう。

「けれどもこれ以上、社員たちを欺いて会社を違法行為に巻き込み続けるなんて無理だ。今までのことをみんなに――妻に知られてすべてを失うくらいならと思いつめて、気づいたら……」

屋上にいたのだと、田丸はうなだれた。

「――社長がこれまでしてきたことは、問題解決としては大間違いです」

告白を聞いた千景は、無情に言い渡した。田丸は、ますます深く首を垂れる。

「でも、そうせざるを得なかったことは理解できます。田丸社長は、会社とご家族を守りたかつたんですよね」

はっとしたように顔を上げた田丸は、苦痛に耐えるように表情を歪ませた。

「そうだよ。そのどちらも、失うことになりそうだけどね」

そうはさせません、と千景は社長の言葉を遮った。

「この問題、私に解決させてください。社長の《弱み》を《強み》に変える方法があるんです」

五

「マル・ビューティー新宿西口店の、西堀さん？　せめて店長クラスが来るかと思ったら、サブマネージャーって——」

緒方は小馬鹿にしたように笑うと、受け取った名刺をテーブルに置いた。裏社会とも繋がりがある探偵と聞き、アウトローな見た目を想像していたが、会ってみれば安っぽいスーツ姿の小柄な中年男で、千景は拍子抜けした。

田丸から緒方とのことを打ち明けられた翌日、いつもどおり八時までの勤務を終え、夜九時に店舗近くのカフェに向かった。田丸は自身も立ち会うと最後まで言い張ったが、弱みのある社長が同席することは、逆にこちらが不利になりかねないと説得して思い留まらせた。

「それで、そちらからはどういう条件を提示するつもりですか」

自分だけ頼んだビールのジョッキに口をつけると、組んだ足に肘

を置いて尋ねる。汚れた眼鏡のレンズの向こうから、小狡こずるそうな細い目がこちらを捉えていた。やや緊張しながら、千景は口を開いた。

「まず最初に、押切様の写真を撮影した従業員の稲葉杏菜かいこを解雇します。これでマル・ビューティーと彼女は無関係です」

今さら何を見当違いな、というように、緒方は嘲笑を浮かべた。

「そんなことで、こつちが納得すると思ってるんですか」

話にならないとばかりに鼻を鳴らす。いいえ、と否定し千景は続けた。

「その上で、最終通告させていただきます。これ以上あなたが弊社に何かしらの協力を求めることがあれば、田丸はマル・ビューティーを廃業することです」

これには緒方も驚いたようだ。ジョッキに伸ばしかけた手を止めると、探るように千景の顔を見つめた。内心を悟られないよう、表情を変えず正面から見返す。ややあつて、緒方は「いやいや……」と首を横に振った。

「おたくの社長にそんなことができるはずない。だって母親から受け継いだ会社だろう。それを守りたいから、今までこつちの頼みを聞いてきたわけです」

「そうですね。でも廃業しても、近く再建できるよう手筈てはずを整えてあるとしたら、どうでしょう」

千景の返答に、緒方は足を組み直し、顎を反らした。眼鏡の位置を直すと、射るような眼差しで千景を見据える。

「西堀さん。あんまり適当なことを言うんじゃないよ」

その視線をまっすぐに受け止め、千景は告げた。

「田丸は会社の資産の大半を、稲葉杏菜名義の銀行口座に移してあるそうです」

緒方の細い目が、大きく見開かれた。千景は一呼吸置くと、微笑^{ほほえ}んで続ける。

「別に資産を隠す意図ではないですよ。彼女にとっては当然の権利です。稲葉杏菜は田丸と血の繋がった、実の娘ですから」

稲葉杏菜の母親が、田丸の高校の同級生であることは事実だ。だが二十数年前、同窓会で再会した二人が関係を持ち、杏菜という娘が生まれた——そのことを田丸が知らされたのは、杏菜がホストに入れ込み、返し切れない借金を背負った昨年のことだったという。

当時ホステスとして働いていた稲葉杏菜の母親は、田丸に妊娠したことを告げず、一人で杏菜を産み育てた。田丸の母親が女傑^{うづた}と謳^{うた}われる脱毛エステサロンの経営者であることを知っていた彼女は、自分など到底結婚を許してもらえないと思っただけらしい。しかし娘の窮地^{きゆうち}に、杏菜の借金を清算し、新たな環境で再出発できる

よう後押ししてほしいと連絡してきた。

田丸はこれまで何も知らずにいたことを詫^わび、すぐに頼みに応じた。その際、杏菜が借金をした先に闇金融が含まれていると分かり、そちらの世界に通じているからと紹介された緒方に間に入ってもらった。この経緯については余計な心配をかけまいと田丸の胸に収めたため、杏菜の母親も、当然杏菜自身も把握していないという。

「その一件で緒方に、我が家の事情を知られてしまったんだ。妻がマル・ビューティーの管理職で、一人目を妊娠中だということもね」

緒方は隠し子の存在――さらにはその娘の借金清算のために闇金融と関わったと妻に知らせることを仄^ほめかし、田丸を脅^{おど}していたのだ。もしも社内でも重要な地位にある妻に伝われば、当然他の管理職も知るところとなり、これまで築いた信頼は大きく損なわれる。

田丸の家庭も、そして亡き母から受け継いだマル・ビューティーもどうなるか分からない。加えて田丸は妊娠中の妻にストレスをかけ、お腹の子に何かあったらということも恐れていた。すべてを失うよりはと、田丸は緒方の要求を飲むしかなかった――。

「私が以前働いていた会社、社長が遠縁の身内の口座に会社の資産を移した上で、倒産したんですよ。それで債権者にも、従業員にも一円も払わずに、逃げおおせたんです」

無言のまま、緒方は何かを計算するように落ち着かなく手指を動かしている。

新卒で入社した会社の倒産は、これまでの人生で一番とも言える最悪の出来事だった。しかし計画倒産の手口を学んだことが、こうしてのちに役に立つ日が来るとは思わなかった。

「押切様の件ですけど、あんな無理筋な工作をしてまで、新たな脅迫材料をでっち上げなければいけないほど、焦あせっておられるんですか」

杏菜が借金を作った経緯を知っていたからこそ、麻葉取締官からのDMなどという荒唐無稽こうとうむけいな策略を用いたのだ。そのずさんさが、緒方の追い詰められた状況を示していた。

「田丸は一旦会社を畳むことになっても、いずれもう一度事業を再開できればいいと考えています。早く見切りをつけた方がいいのはありませんか」

千景は姿勢を正し、あえて強い声で言い立てた。

実のところ、田丸が会社の資産を杏菜の口座に移したという事実はない。そしてマル・ビューティーを廃業する気も、さらさらなかった。千景はブラフを仕掛け、腹を括くって賭けに出たのだ。

「加えて、田丸はもう、奥さんにすべてを打ち明けるつもりでいるそうです」

それはあくまで無事に出産が済んでからの予定だが、あえて言い添えると、緒方は眉を吊り上げた。

緒方自身も裏社会の組織から依頼され、金を預かっている立場だ。退路を断って抵抗する相手に、これ以上協力させるべきか。それとも引くべきか――。

緒方は貧乏揺すりをしながら、しゅんじゆん 逡巡するように顎先をしきりにこすっていた。やがて舌打ちをするとジョッキの残りを飲み干し、千円札を一枚叩きつけるように置いて席を立った。

肩をすくめてドアの向こうに消えるひんそう 貧相な背中を見送ったのち、深く息を吐く。店員に空いたジョッキを片付けるよう頼み、千景はスパークリングワインを注文した。飲み物が運ばれてくるまでに、田丸に結果を報告する短いメールを打った。

無事問題は解決し、ひとまず再び無職になることはなさそうだ。あんど 安堵に包まれながら、光る泡が立ち上るグラスに口をつける。こわばっていた体から力が抜けた。

椅子に背を預け、視線を窓に移す。街を彩るクリスマスのイルミネーションが、千景をねぎらうようにきらきらとまたた 瞬いた。

【了】